高等学校家庭科における保育体験学習を取り入れた授業実践研究
—体験学習形態による生徒の学びについて—

家庭科　　小清水　貴　子

近年，保育体験学習の必要性が増している。保育体験学習によって高校生がどんな学びを得ることができるのかを明らかにするため，体験学習形態による生徒の学びについて比較検討を行った。その結果，同じ実習時間でも集団対集団でかかわる交流型体験と生徒個人対園児集団でかかわる実習型体験では，学びの質に違いがみられた。交流型では幼児観察や，遊び相手として幼児とかかわることが中心であった。実習型では学びの内容に広がりがあり，保育者として園児とかかわろうとする姿がみられた。

キーワード：高等学校　家庭科　保育　体験学習

1．研究の目的

近年，家庭科教育において保育領域の学習が重要視されている。学習指導要領によると，高等学校家庭科の保育領域は，「家庭基礎（２単位）」「生活技術（２単位）」では「（１）人の一生と家族・家庭　イ乳幼児の発達と保育・福祉」，「家庭総合（４単位）」では「（２）子どもの発達と保育・福祉」にそれぞれ位置づけられている。学習目標としては，乳幼児の心身の発達や生活習慣を理解すること，親になることや次世代を生み育てることの社会的意義を認識することが定められている。つまり，少子・高齢化を迎え，現代社会の状況を生徒自身が理解し，次世代を育む人材の育成が求められているといえる。

学習指導要領解説でも，普通教科「家庭」の各科目の内容の改善として「③少子化の進展に対して，子どもがどのように育つのかに関心をもち，子どもを生み育てることの意義を理解する学習を重視するために，子どもの発達と保育に関する内容の充実を図った」とある[1]。

しかし，保育の学習では，次世代を育む力を育成するだけではなく，生徒自身が自己の成長・発達を振り返るとともに，人としての生き方についても学ぶことが必要である。牧野も，家族領域と合わせて保育領域をとらえ，「人間の誕生から死までの学習として，ヒトの特徴や人間の発達のすばらしさ，人間の一生や人生について考えること」が保育学習に必要であると述べている[2]。人の成長・発達の過程を理解するとともに，自分の育ってきた道筋をたどり，これからの生き方を考える上で，保育学習は，生徒の進路や職業選択にもかかわってくる領域であるともいえる。生徒が身近な問題として保育学習をとらえることができる環境が望ましいが，現実は，核家族化や少子化によるきょうだい数の減少により，実際に生徒たちが乳幼児とかかわる機会は少ない。そこで，学校教育の中で，保育の現場にふれる機会を生徒に与えることの重要性が問われているといえる。

学習指導要領の科目の内容構成及び取り扱いについてみると，「家庭基礎」「生活技術」では「学校や地域の実態等に応じて，学校家庭クラブ活動等との関連を図り，乳幼児や高齢者とのふれあいや交流など実践的な活動を取り入れるよう努めること」と記され，「指導に当たっては，学校家庭クラブ活動等との関連を図り，幼稚園や保育所等を訪問したり，乳幼児を学校に招くなどして，実際に乳幼児とのふれあいや交流などの実践的な学習活動を取り入れるようにする」[3]と解説されている。

「家庭総合」では「学校や地域の実態等に応じて，学校家庭クラブ活動等との関連を図り，幼稚園や保育所等の乳幼児，近隣の小学校低学年の児童等とのふれあいや交流の場をもつよう努めること」と記され，「指導に当たっては，学校や地域の実態等に応じて，学校家庭クラブ活動等との関連を図り，幼稚園や保育所等の乳幼児，近隣の小学校の低学年の児童等とのふれあいや交流の機会をもつように努めるなど，実践的・体験的な学習活動を中心として，いわゆる座学にならないよう留意する」[4]と解説されている。また，これからの保育教育のあり方について，河野も「子育て理解教育」の必要性を説き，「実際に乳幼児とかかわる学習を核として，子ども理解を深め，自分もこのように育ってきたという実感をもたせて，親となるための準備教育をしたいと思っている」[5]と述べている。つまり，保育学習の必要性とともに，学習を進めるにあたり積極的に体験学習を取り入れることが求められているといえる。

確かに，生徒たち自身にとっても，保育体験学習を行うことは，乳幼児とふれあい，子どもに対する理解を深

めるとともに，自分の育ってきた過程を振り返り，自己理解に役立てることができる。また人間形成の場としての集団保育の意義や，子どもが育つ環境に目を向けたり，卒業後の進路選択や職業について考える機会にもなるといえる。

しかし実際のところ，体験学習を行うためには，実習の受け入れ先が必要であり，実現することはなかなか難しい。仮に受け入れ可能となっても，在籍園児数と実習生徒数の関係から，実質的なかかわりではなく，集団対集団で幼児とともに遊ぶ活動，つまり遊び相手として幼児に接する交流型体験学習がほとんどである。これまでの授業実践報告[6]にも，園児と一緒に遊ぶ活動を体験学習の柱にしている授業実践が多く見受けられる。

そうした集団としての交流型体験学習では，１回の授業で多くの生徒が体験できること，幼児と一緒に楽しく遊ぶことにより，「子育ては楽しいと思う」「子どもを好きになる」など，生徒が子育てに対して肯定的な印象をもつ効果があるといえる。

しかし，実際に実施するには，授業の時間と園児の活動の時間が上手く合うように，授業時間の調整が必要になる。園が近い場合は，授業の振り替えなどで対応できる場合もあるが，園が遠方にある場合，公欠扱いで１日をかけた調整を要する場合も出てくる。

また園においても，実習生徒を集団で受け入れるということは，一日の保育のプログラムを組みなおすことが必要になったり，日頃の園生活と異なることから，園児への影響も大きく，受け入れを負担に感じる園もある。地域社会とのかかわりが希薄化している中で，体験学習を通じて，学校と地域の園が連携して，園児・生徒を育んでいく環境作りの第一歩にするためにも，園への負担を軽減するとともに，生徒もイベント的に幼児とかかわるだけではなく，通常の保育状況を観察し，実体験できる学習が必要なのではないかと考える。

現代の高校生が乳幼児とかかわる機会はほとんどない状況では，イベント的であれ乳幼児と交流する機会を得られることは幸せなことである。乳幼児とのふれあいを楽しいと感じ，子育てをプラスイメージでとらえることも「子育て理解教育」にとって必要なことである。

しかし，実際の育児は，乳幼児と日々向き合わなくてはならないもので，決して楽しいものばかりではない。保育関係の進路を考えている生徒にとっても，乳幼児と遊ぶことだけが仕事ではなく，世話をしたり，機嫌がよい時も悪い時も向き合い，発達を手助けしていかなければならない。

そこで，保育体験学習を行うことで，高校生がどんな学びを得ることができるのかを明らかにしたい。集団対集団で子どもとかかわる交流型体験学習，また乳幼児のクラスに生徒が一人で入ってかかわる実習型体験学習，また乳幼児と生徒がマンツーマンになる親子型体験学習など，体験学習にもさまざまな形態が考えられる。体験学習の形態が変わることで，生徒の学習内容も変わってくるであろう。本研究では，交流型体験学習と実習型体験学習の２つの形態について比較検討を行う。体験学習形態の違いが，子ども理解や自己理解，将来の進路選択などについて，生徒の学びとどのように関係しているのか，また保育体験学習をより効果的に行うためにはどのような形態がよいのかを探り，保育体験学習のあり方を明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

幼稚園と保育所でそれぞれ授業実践を行い，授業後の生徒のレポートをもとに，体験学習形態による違いが生徒の学習に与える影響について，分析を行った。

１）本研究で行った授業の概要

保育体験学習は，平成15年2月下旬に，東京都内の私立女子高等学校３年生（計31名）に対して行った。

授業実践校は，東京の都心部にあり，学校から徒歩圏内に幼稚園・保育園が立地している。教育課程については，「家庭一般」を第１・２学年で２単位ずつ履修し，保育領域は第１学年で学習する。さらに，家庭科の選択科目として，第３学年に「保育（２単位）」を設定している。保育系の進路を希望する生徒も多く，保育に対する関心は高い。しかし体験学習については，１学年８クラスあり，各クラス35名前後と生徒数が多く，都心部で在園児数の少ない園では受け入れが困難であること，また時間割上，「家庭一般」「保育」とも，２単位連続ではなく１単位ずつの授業で，園との授業時間の調整や体験に充分な時間を取ることが難しい状況から，体験学習の必要性を感じつつも，実現には至らなかった。

そこで，卒業前に毎年実施している特別授業の一環として，本授業を位置づけ，実践を行うことにした。特別授業とは，第３学年の３学期に約２週間にわたり，教員が多様なテーマを設定し，生徒が希望の授業を受講するというものである。講座数をできるだけ増やし，少人数のゼミ形式で，日頃の授業では行えない体験や実習活動を取り入れたり，生徒の興味・関心をひき出し，生徒自らが学び，考えることができる授業作りを目指している。

本授業も，その特別授業の一講座として実施した。実習の受け入れ先となる幼稚園・保育所との事前打ち合わせを行い，複数の生徒が集団として，子どもとふれあう「交流型体験学習（以下，交流型体験と記す）」と，生徒が一人で子どもの生活の場に入っていく「実習型体験学習（以下，実習型体験と記す）」を実施することにした。

保育体験学習の流れは表１に示したとおりである。

生徒には，どちらの体験学習を行うか，事前に選択させた。生徒の意識を刺激するとともに，体験学習をより効果的に行うために，事前学習を２回行った。事前学習では，「子どもの成長・発達」に関する学習事項の復習，コミュニケーションの取り方・遊び方，お土産作りを兼ねて折り紙の学習を行った。

表１　保育体験学習の流れ

	交流型体験学習	実習型体験学習
事前学習	【校内での指導】 １）平成 14 年 12 月 13 日（課題提示） 実習に参加するにあたり、冬休みの課題として、実習用エプロンの作成、幼児とのコミュニケーションをとれるように遊び方・教材について考える。 ２）平成 15 年 2 月 7 日（2 時間） 実習についての心構え、幼児へのプレゼント作り（折り紙のメダル）を行う。	【校内での指導】 １）平成 14 年 12 月 13 日（課題提示） 実習に参加するにあたり、冬休みの課題として、実習用エプロンの作成、幼児とのコミュニケーションをとれるように遊び方・教材について考える。 ２）平成 15 年 2 月 7 日（2 時間） 実習についての心構え、幼児へのプレゼント作り（折り紙のメダル）を行う。 【保育園での指導】 平成 15 年 2 月 17 日（2 時間） １）園長先生によるオリエンテーション ２）施設見学
体験日時	平成 15 年 2 月 25 日 授業時間　8:30 ～ 12:30 体験学習　9:00 ～ 11:00（２時間）	平成 15 年 2 月 24・25・27 日 授業時間　8:30 ～ 12:30 体験学習　9:00 ～ 11:00（２時間）
場所	東京都内の区立幼稚園	東京都内の区立保育園
受講生徒数	計 18 名　※（ ）は園児数 内訳 3 歳児クラス　6 名　（11 名） 4 歳児クラス　4 名　（10 名） 5 歳児クラス　6 名　（13 名）	1 日 5 名×3 日間 計 15 名 ※ 1・2・3・4・5 歳児の各クラスに、各日生徒 1 名が担当として入る。
学習のねらい	幼児とふれあう体験を通して、子どもに対する理解を深めるとともに、人間形成の場としての集団保育の意義、子どもを取り巻く環境について考える。また、幼児と触れ合う楽しさを感じ、今後の進路などに生かせるようにする。	
実習内容	１）教頭先生によるオリエンテーション 幼稚園や幼児について ２）2 月の誕生会に参加 幼児の出し物を観察する。 ゲームを通して、幼児とふれあう。 ３）各担当クラスに分かれて、幼児と遊ぶ。3 歳児クラスでは、遊んだ後、幼児達の演じる劇を観る。4・5 歳児クラスは部屋や園庭で自由に遊ぶ。	１）事務所で挨拶。 ２）各担当クラスに入り、幼児と関わる。
事後学習	学校に戻り、体験学習の内容・感想をレポートにまとめる。	

体験学習はどちらも半日行った。朝，学校に集合して着がえて実習に出かけ，実習後は学校に戻り，体験内容と感想をレポートにまとめて提出させた。

2）学習効果の分析方法

体験学習形態による違いが生徒の学習に与える影響を明らかにするために，生徒のレポートに書かれた感想文をもとに，分析を行った。レポートは，各自の活動を振り返る目的で「活動内容」と，体験学習に対する「感想」を書く欄を設定した。感想は自由感想文の形式をとり，感じたこと・気づいたこと・考えたことを自由に記述するように指示した。

生徒がレポートに記述した自由感想文は，個々の生徒が，体験学習でどんなことを学んだのかを教師側が把握するのに役立つ。また生徒が主体的に記述することから，どんなことが強く印象に残ったのかを読み取ることもできる。そこで，本研究では，生徒が自由に記述した感想文から，生徒の学習効果を分析することにした。

まず，感想文の内容を，つぎの７項目「(1) 園児の成長の様子 (2) 保育者の様子や仕事 (3) 園の設備や取り組みについて (4) 自己の成長の振り返り (5) 進路・将来について (6) 体験学習の自己評価 (7) 体験学習の授業について」に分類した。交流型体験と実習型体験のそれぞれに対して，各項目に対する記述の有無と記述内容の比較分析を行った。

3．研究結果および考察

1）生徒自身が設定した保育体験学習の目的

今回の保育体験学習の大きなねらいは，表１に記したとおりであるが，体験学習に出かける前に，レポートに，生徒一人一人が訪問の目的を記すように指導した。これは，学習の目的を生徒自身が認識し，短い時間の中で目標をもって子どもとかかわって欲しいという思いからである。生徒がレポートに記述した訪問の目的を分類すると，表２のようになる。

表２ 生徒個人の体験学習の目的 （延べ人数）

訪問の目的	交流型体験	実習型体験
	１６	１５
子どもとふれあう	9	6
成長・発達の様子を知る	5	7
かかわり方を学ぶ	4	7
保育者の仕事を学ぶ	4	8

「子どもとふれあう」「一緒に遊ぶ」など，「子どもとふれあう」ことを体験学習の目的にあげた生徒は，交流型体験の方が多かった。事前に生徒自身が，どちらの体験学習を選択するか考えたときに，一人で園児の中に入っていく自信がない生徒は，集団対集団のかかわりになる交流型体験を選択する傾向があり，その結果，「子どもとふれあう」ことが目的にあげられたといえる。これに対して，実習型体験のグループでは，将来の進路として保育士を希望する生徒，今回の体験学習以前にボランティア等で幼児とふれあう体験をしている生徒が選択する傾向があり，その結果，体験学習の目的においても「かかわり方を学ぶ」「保育者の仕事を学ぶ」が多かった。

2）感想にみる記述項目

生徒がレポートに記した自由感想文の内容について，記述項目ごとに集計した結果は表３のとおりである。全員の生徒が，園児の様子を細かく記載しており，園児の成長の様子が，最も印象深かったといえる。

記述項目を多い順にあげると，「園児の成長の様子」「体験学習の自己評価」「体験学習の授業について」「保育者の様子や仕事」であった。

表３ 自由感想文の記述項目 （人）

記述項目	交流型体験	実習型体験	合計
	１６	１５	３１
園児の成長の様子	１６	１５	３１
保育者の様子や仕事	１０	１０	２０
園の設備や取り組み	4	2	6
自己の成長の振り返り	4	2	6
進路・将来について	8	8	１６
体験学習の自己評価	１５	１５	３０
体験学習の授業	１６	１２	２８

3）項目ごとに記述された内容の比較

（１）園児の成長の様子

「元気がよい」「走るのが速かった」など，どちらの体験も，園児の成長の様子がたくさん記述されていた。交流型体験では，とくに身体的・運動的発達に関する記述が多かった。これは，誕生会で３歳児～５歳児を一緒に観察する機会を得たことで，年齢による発達の違いを理解することにつながったといえる。しかし観察中心で，ふれあう時間が十分に取れなかったことから，記述内容は，「みんなの前でしっかり司会をしていた」「自転車にのっていた」など，表面的に見て取れる記述が多かった。その中でも，別れ際に園児と握手を交わした生徒の

レポートには，「…あと気づいたことがあります。握手したとき，みんな手があたたかかったです。ちなみに私の手は冷たかったです。やっぱり子どもの体温って高いんですね。一つの発見でした（5歳児クラス）」
とあり，園児とのスキンシップを通して，知識として学んだ幼児の体温の高さを実感できたといえる。

一方，実習型体験では，身体的・運動的発達の他に，精神的発達に関する記述がみられた。実際にふれあうというコミュニケーションを通して，「子どもは想像力や発想力が豊かで，大人では思いつかないことを考えていました（3歳児クラス）」「子どもはほめることを求めてきた。私が“上手だねえ”とある子にいうと，“私も上手って言って”って言ってきた。子どもはほめると喜んでくれた（2歳児クラス）」などの記述があり，園児と深くかかわり，園児の成長の様子とともに，コミュニケーションの仕方を学んだことがうかがえた。

（2）保育者の様子や仕事

この項目では，園児への対応の仕方や保育者の仕事などを記したものを分類対象とした。ともに，将来，幼稚園教諭あるいは保育士を希望している生徒のレポートに記述が多くみられた。

交流型体験では，「園長先生が子どもの名前を全部覚えていてびっくりしたのと，先生たちの話し方が優しくて，やっぱりすごいと思いました。お歌もみんなが楽しめるように振りつけしたりとか，尊敬！あと，準備も大変だなあと思いました。…お片づけもきちんと出来ていて，先生方の苦労が目に浮かぶようでした（3歳児クラス）」「お誕生会では，歌やゲームなどを入れて，園児をひきつけているのだと思いました。先生方も園児と話をするときには常に中腰になっているのに気づき，少しでも近くにいるのだとわかりました（4歳児クラス）」などがあった。

実習型体験では，「おもちゃの取り合いがあったとき，“仲良く使おうね”等言っても取り合いはおさまらず，先生がきて“同じのないかな？”と言って，ブロックを探し，3つ色違いのブロックを子どもの前に出し，“どれがいい？”と聞くと，さっきとは違うブロックを選んで取り合いはおさまりました。やっぱりいつも子どもと接している人はすごいと思いました（2歳児クラス）」，「泣き止まない子がいて，男性保育士さんの対応の仕方をみて，凄く勉強になりました。優しくなだめるだけでなく，きつく“いけないことはいけない”と，ちゃんと教えることが一番大切なようでした（3歳児クラス）」など，生徒自身が対処できなかった場面を振り返り，保育士から園児へのかかわり方を学び取ろうとした姿が見られた。具体的な状況を経験することで，保育士の仕事をより具体的に感じ，また保育士の仕事をよく観察していたといえる。

（3）園の設備や取り組みについて

どちらの体験学習にも少数の記述があった。「今日，訪れた感想はまず全てが小さいと思いました。とくに驚いたのは鏡です。私が立ってみると腰から下しか映らなくて，園児はこんなに小さな身体なんだなあと改めて感じました（交流型体験・5歳児クラス）」「施設は段差が少なく，物でもだいたいのものは角が丸く，けがの防止がされていた（実習型体験・5歳児クラス）」

また交流型体験では，「お誕生日会終了後に，お誕生日を迎えた園児のお母さんのお話しはとてもためになりました。おなかの中にいた時からの友だち…すてきだし，うらやましいです（交流型体験・5歳児クラス）」と，園児の母親の話に感動した生徒もおり，こうした体験談を保育の授業の中に取り入れることも，「子育て理解教育」につながると思われる。

（4）自己の成長の振り返り

自己の成長を振り返ったり，親に対する感謝など，自己理解に関する記述は予想より少なかった。思いがけず交流型体験のグループに，訪問先の教頭先生に小さい頃お世話になったという生徒がおり，久しぶりに恩師と再会した生徒は「先生のお話しから自分の幼稚園での楽しかった思い出の一つ一つに，先生方の見えない努力があったのだなあと改めて感じました。今まで，私は先生に教えてもらう学生，お世話をしてもらう園児の立場でしたが，今日こういった機会でお世話する側（…と言っても先生方がなさるようなことは何もできず，ほんの少し遊び相手になった程度なのですが）になってみて，新しく発見することがたくさんありました（5歳児クラス）」と記しており，自分の成長過程を振り返っていた。

先の項目（3）と同様に，親や保育者など自分を育ててくれた人の話を聞くことは，自己理解に役立つ学習活動になるといえるだろう。

（5）進路・将来について

将来に関する感想は，16名と半数近くの生徒にみられた。進路にかかわる記述が大半で，親になることについてふれた生徒は2名だった。今回の授業は，保育関係の

進路に関心のある生徒対象であったことがその原因にあげられる。一般の生徒対象であれば，親準備教育としての保育体験学習のあり方まで追求できたと思われる。2名の生徒は，ともにプラスイメージで子育てをとらえていた。また保育関係の進路を希望する生徒にとっては，「将来，私は幼稚園教諭を目指しているので，これからも今日みたいな体験や実習をしていくと思いますが，子どもたちの目線でいろんな事をみていけるような保育士になりたいと改めて思いました（交流型体験・3歳児クラス）」「私も保育士を目指す第一歩の勉強ができてよかった（実習型体験・5歳児クラス）」など，とても有意義な経験になった様子がうかがえた。

（6）保育体験学習の自己評価

体験学習に参加するにあたって，授業前に不安を感じていたことを記述した生徒は，交流型体験で8名，実習型体験で14名であった。「幼稚園訪問をする前，私はわくわくとドキドキの混ざったような気持ちでした。小さな子どもたちと接したことがないので，不安でした（交流型体験・4歳児クラス）」「今回，園に行ってとても楽しく過ごすことが出来ました。私は子どもと話をするときはちゃんと腰をおろして話すことを心がけていました。私は一人っ子なので，下の子どもに対してどう接すればよいのか，戸惑いもあったけれど，子どもたちや先生方を見ていると自然と接し方を学びました（交流型体験・5歳児クラス）」など，子どもからの働きかけによって自然に接することができたり，子どもの笑顔で緊張が解けるなど，不安が解消された様子が読み取れた。「普段，小さい子どもと接する機会が全然ないので不安でした。けど，いざ一緒に遊んでみると，みんな明るく声をかけてくれて自然となじむことができました。年齢は，全然，私の方が上なのに，立場は逆でした。子どもは思ったことをはっきり言う正直な所があります。だから私も素直な気持ちで接しました（交流型体験・5歳児クラス）」など，子どもに何か教えるという立場ではなく，子どもから生徒が力をもらった様子がうかがえた。

実習型体験では，生徒一人対集団の子どもということもあり，生徒の不安や緊張感は交流型体験に比べると，とても大きかったと感じる。しかし，どの生徒もその壁を乗り越え，子どもとのコミュニケーションをとっていた。自分からどう働きかけるか，子どもとの接し方について悩んだ分，かかわりが深まっていたように思う。「最初はとても緊張していて，なかなか子どもたちとうまく接することができなかったけれど，子どもの方から来てくれて，名前を呼んでくれたり，先生って呼んでくれたりして，とても嬉しかったです。前に保育園へボランティアに行った時，積極的に話しかけたり，行動したりすることができませんでした。今回，自分からちゃんと話しかけたりするのを目標にしていました。子どもからも来てくれるけど，自分から話しかけるともっと子どもの方もなじんでくれたし，名前を覚えて呼んであげるだけで，寄ってきてくれたので，こういうことが大事なんだと気づきました（実習型体験・4歳児クラス）」「最初は私になついてくれるかなあなど考えすぎてしまい，すごく不安でした。もともと子どもとどう接していいか…子どもが苦手な部分がありました。先生が“独占してはいけない”と言っている意味がわかりました。1つのことをしていても違う子が…違う子が次々といろいろなことを要求してきます。少し困ったけど，私もその時の対応をできるようになりました（実習型体験・3歳児クラス）」などの感想があった。

（7）保育体験学習の授業について

どちらの体験学習でも，「貴重な体験だった」「参加してよかった」「また次の機会も参加したい」などの感想が多くみられ，否定的な感想は無かった。

「授業では学べなかったことを，今回の体験学習により，保育とはどういうものなのか，子どもたちの成長とは教科書どおりなのか，と思っていたことを教えてもらいました。楽しく過ごせることができました（交流型体験・3歳児クラス）」「時間が過ぎるのがとても早く感じたので，もう少し時間があると嬉しかったです。中学の時にも，保育園実習があって，その時には5人1班で行ったのに比べ，今回は1人つき1クラスだったので，そういうところも良かったです（実習型体験・5歳児クラス）」という感想もあり，保育体験学習を有意義なものとしてとらえていることがわかった。

4．まとめと今後の課題

保育体験学習が，高校生にどんな学びを与えることができるのかを明らかにするために，集団対集団で子どもとかかわる交流型体験学習，また乳幼児のクラスに生徒が一人で入ってかかわる実習型体験学習の2つの形態について，それぞれの体験学習に参加した生徒のレポートの自由感想文をもとに，比較検討を行った。その結果，以下のことが明らかになった。

1）生徒自身が設定した保育体験学習のねらいをみると，「子どもとふれあう」ことをねらいにあげた生徒は，交

流型体験の方が多かった。これに対して，実習型体験では，「かかわり方を学ぶ」「保育者の仕事を学ぶ」が多く，積極的に体験学習に参加した様子がみられた。

2）自由感想文に生徒が記述した内容をみると，「園児の成長の様子」「体験学習の自己評価」「体験学習の授業について」「保育者の様子や仕事」の順に多く記述されており，「園児の成長の様子」が生徒にとって最も印象深い内容であったといえる。

3）園児の成長の様子では，交流型体験では身体的・運動的発達に関する記述が目立ったのに対して，実習型体験では精神的発達に関する記述がみられた。園児と個別にゆっくりかかわることにより，総合的に園児の成長を観察することができるといえる。

4）保育者の様子や仕事に関する記述は，将来，幼稚園教諭あるいは保育士を希望している生徒のレポートに多くみられた。交流型体験よりも実習型体験では，生徒自身が対処できなかった場面を振り返り，保育士から園児へのかかわり方を学び取ろうとした姿が見られ，保育士の仕事についてもよく観察していた。

5）自己の成長を振り返るなど，自己理解に関する記述は少なかったが，体験学習以外でも，親や保育者など自分を育ててくれた人の話を聞くことにより，自己理解に役立つ学習活動を行うことができるといえる。

6）自分自身が将来，親になることにふれた生徒は少なく，進路に関する記述が目立ったが，交流型体験・実習型体験ともに，有意義な学習になった様子がうかがえた。

7）保育体験学習の自己評価については，半数の生徒が授業前に緊張や不安を感じていた。その傾向は，実習型体験の生徒に多くみられた。しかし，体験学習を進めるにつれて，緊張や不安は解消されていた。実習型体験では，壁を乗り越えることにより，子どもとのかかわりがより密接になっていたように感じられる。肯定的な自己評価が多くみられた。

8）保育体験学習の授業については，どちらの体験学習でも，「貴重な体験だった」「参加してよかった」「また次の機会も参加したい」などの感想が多くみられ，有意義な学習になった様子がみられた。

保育体験学習を実施するには，生徒が保育体験学習に何を望んでいるのか，またどんな目的をもって体験学習に臨むのかを明らかにし，学習形態を選択していくことが必要である。

交流型体験と実習型体験のそれぞれの学習形態による生徒の学びの内容を比較すると，交流型体験では表面的な観察が中心となり，子どもと深いコミュニケーションをもつことには限界がある。対児感情がよくない生徒や保育に強い関心や興味を抱いていない生徒にとっては，子どもとのふれあいをねらいとして，自分たち高校生の集団に守られ，気持ちの拠り所を得た状態で，園児との交流をもつ状況が適しているといえる。

逆に，園児との深いかかわりや進路に関する学びを得るには，実習型体験の方が有効であるといえる。実習型体験は，体験学習に臨む前の不安は大きいが，その不安を乗り越えた実習後の生徒の表情は，みんなきらきらと輝いていた。実習型体験では，同じ人間として園児の目線に立ってコミュニケーションをとるだけではなく，保育者としてどんな役割を果たすべきか，自分の立場を考えて行動しなくてはならないと感じた生徒が多く見られた。一人で臨む体験学習では，自分だけが頼りである。これまで学んだこと，体験したことを土台にして考え，クラスの保育士の動きを観察しながら，行動していた。こうした体験は，状況に応じて行動する力を培うことにもつながるだろう。

今後の課題として，以下の３つがあげられる。

第一に，体験学習の受け入れ先である園の確保である。どのような園で体験学習を行うのかによって，生徒の学びも大きく変わってくる。

現在，幼稚園では幼稚園教育要領に基づき，地域交流を積極的に進めている。今回の授業を実施した幼稚園では，園児数の半分にあたる生徒を快く受け入れていただくことができた。園側では，今回の授業のテーマを「高校生との交流」とし，「地域の学校に通う人たちと交流をし，様々な人との触れ合い方を知ったり楽しんだりする」ことをねらいにしていた。そういう点で，集団対集団の体験学習が実現しやすい状況にあったといえる。

逆に，今回の授業を実施した保育所では，高校生との合同行事を行うことは敬遠された。できる限り，園児たちの日頃の生活リズムを乱さないように，自然な形で実習を行うことを条件に，１日受け入れ生徒数は５名まで，各クラス１名ずつの配置となった。園からは，今回の体験学習を一過性のものにせず，放課後や長期休業中のボランティア活動につなげ，園児との心のふれあいを大切にして欲しいとの要望があった。朝から夕方まで１日の体験を少なくとも３日間行うことが，当初，園の希望であった。しかし，授業の範囲で３日間の体験学習を行うことは難しく，また給食の介助を扱う場合には保健所での保菌検査を必要とすることから日数と費用の面で，半日のみの体験学習になった。

学習指導要領でも保育体験学習の必要性が強調されて

おり，実現するためには，幼稚園，保育所，小学校などとの連携が必須条件である。お互いの負担の少ないところで，学校と地域が手を取り合って，園児や生徒を育んでいく環境作りが求められる。

第二に，第一の課題とも関連するが，多くの生徒に保育体験学習の機会を与えることである。少子化により園児数も減少傾向にあるが，体験学習は，保育を学ぶ高校生にとって，机上の知識だけでは得られない貴重な体験の場である。保育に関心をよせる生徒も多い。本実践も，特別授業の一講座として生徒の参加を募ったところ，応募が殺到し，改めて生徒の保育に対する関心の深さが感じられた。受け入れ先の園との調整もあり，最終的には，保育系の進路を希望する生徒や保育に強い関心を持っている生徒に対して行うことになったが，すべての生徒に対して行えるような体制が必要であるといえる。

第三に，保育体験学習を単にふれあいの場にするのではなく，高校生として，進路や生き方に広げて考える機会となる体験学習が必要である。本研究で取り上げた実習型体験はその点では有効であるといえる。

また実習型体験では，子どもと遊ぶ体験だけでなく，子どもの生活全般と接することができる。近年，高校生の子どもとの接触経験を聞いてみると，遊ぶ体験はあっても，子どもの基本的な生活習慣にかかわる生活場面での接触経験はほとんどない。子育ては子どもと遊ぶだけでなく，食事や着脱衣などの基本的生活習慣を身につけさせるなどの躾を行うことも必要である。子どもの生活的自立の援助をしたり，機嫌の悪い子どもの相手をするなど，子どもの生活をじかに肌で感じながら，子どもとコミュニケーションをとることのできる体験学習の場が求められる。

しかし何よりも体験学習を成功させる鍵は，生徒自身のやる気にある。生徒自身がどのような気持ちで体験学習に臨むのか，その心構えが大切であろう。

今回の実践で，生徒の感想に「先生方には何も教わりませんでした。でも，見ていてわかったことは，自分のことは自分でするようにしつけていました（４歳児クラス)」「直接あれこれやってとは言われなかったので，逆にこういうときはこうするんだなあってことがいくつもありました。訪問前日は本当に不安で不安で，色々考えて“あー”って感じだったけど，教室に入って子どもたちと遊んでいたらだんだん不安もなくなり，前日とは逆に“もっと一緒にいたい！”って思いました（２歳児クラス)」など，保育士の指示に応じて行動する心づもりで，体験学習に臨んだ生徒もいた。各クラスに入った生徒たちは，保育士からの指示や援助はなく，自分で自分の居場所作りから始めなくてはならない状況におかれた。どうやって子どもたちの中に飛び込んでいけばよいのか，助けを求めた生徒が一人いたが，「これなーに？」など，言葉かけをしながら子どもたちの輪に溶け込んでいた。その生徒は感想文に，「遊戯王を知らない私にみんながいろいろと教えてくれました。みんなとても優しくいい子ばかりで，よかったです。こまをやっているのを見せてくれたり，このゲームがおもしろいなどいろいろ教えてくれました」と記述している。このように，指示待ちではなく，自分が主体となってかかわっていく気持ちをしっかりもって体験学習に取り組むことが必要である。気持ちがしっかりしていることで，体験学習で直面する課題も乗り越えていけるであろう。

また近年，保育体験学習は中学校家庭科教育や総合学習でも取り組まれており，それらの体験内容も考慮に入れた学習内容にしていくことが求められる。

保育体験学習のあり方について，幼稚園や保育所などの集団保育の場に出かけていくことが一般的に行われているが，乳幼児を学校に招いたり[7]，また保育所が行う７か月乳児検診に高校生が参加する実践[8]もなされている。７か月乳児検診に生徒が参加する取り組みでは，乳児一人に高校生が付き添い，身体計測や発達の状況，保護者へのインタビュー，絵本の読み聞かせ，離乳食の与え方など育児上の注意などを体験するとともに，併せてエイズに関する学習指導も行っている。

保育体験学習をより意義のあるものにしていくためにも，学習形態，学習内容をよく吟味し，生徒や学校，実習受け入れの園，それぞれの状況にあったものにアレンジしていくことが，今後一層求められるであろう。

引 用 文 献

1）文部科学省(2000) 高等学校学習指導要領解説　家庭編，p. 12

2）牧野カツコ(1985) 家庭科教育における保育の教育 家庭科教育，家政教育社，第69巻13号，pp. 5-14

3）前掲書1）p. 30, p. 80

4）前掲書1）p. 52

5）河野公子(2003) これからの保育教育のあり方について，家庭部会報，全国高等学校長協会家庭部会，第101号，pp. 33-45

6）今濱勝久(2003) 保育体験学習の推進と充実，家庭部会報，全国高等学校長協会家庭部会，第101号，pp. 62-68

大路雅子他(1998) 雑誌掲載事例にみる中学・高校生の乳幼児体験学習の効果と問題点，日本家庭科教育学会誌，日本家庭科教育学会，第44巻1号，pp. 55-62

7）牧野カツコ編(1996) 赤ちゃんを招待しよう，人間と家族を学ぶ 家庭科ワークブック，国土社，pp. 92-93

8）石川實編(2002) 高校家庭科における家族・保育・福祉・経済―「家庭総合」・「家庭基礎」指導の基礎知識―，家政教育社，pp. 226-232